

学校のちよつといい話 18

英語嫌いだっただ私が

英語教師に②

前話では、英語学習をやり直した契機について述べた。今回、続編として学習法を紹介させていただく。自身の英語学習をキーワードにすると「自分に合う英語学習法」と「習慣化」の二点であろう。そこで、今回はこの二点について以下に述べたい。

英語学習をやり直す直前の私の英語力は「英検三級程度、TOEIC®L&Rテスト二四〇五点」であった。そもそも、英語学習の方法自体をよく知らなかった。このような状況の中、在学していた大学のS先生からある学習方法を学んだ。その方法とは「中学一年で使用した教科書を和訳しなさい。そして、その和訳したものを英訳しなさい。そこで疑問がわいたら僕のところへ質問に来るといい」と至ってシンプルなもの。中学一年生の内容ほど疑問がわいてくる。その度にS先生に質問する。例えば「なぜ動詞の形が不規則に変化した

りするのかわ」や「8 o'clockのoとは何か」など。この一連の方法を一年間徹底的に続け、基礎を身につける。この学習方法は私の肌に合っていたようだ。

次に、私は学習しない日を作らないように、習慣化に注目した。例えば、英検取得のために有志学習グループに参加し、毎週Skypeで模試学習を行った。通勤(電車)時には必ず英語教材に触れた。スピーキング力向上のため、某オンライン英会話レッスン(一日二十五分)を毎日受講し、時間が取れない日は、通勤途中の駅のホームで行う、などの仕組みを作っていた。蛇足であるが、オンライン英会話は現在も受講しており、約八年間で通算二九〇回受講している。英語学習を再スタートしてから、英検一級を取得するまで約十三年を費やした。その間、「英検準一級の不合格九回」「英検一級の不合格十六回」の辛い経験も味わった。

人によって学習方法は様々だが、筆者の学習方法が何かの参考になれば幸いである。(細喜朗)

家族の絆 エッセイから

うけつがれてきた田んぼ

行方市立麻生東小学校五年 平山 大雅
 ぼくの家では、ゴールデンウィークに、家族全員で田植えをします。ぼくの役割は、トラクターのあとをきれいにすることです。小さいころは、見るだけでしたが大きくなって手伝える事が増えました。田植え前の種まきも、苗箱を運んだり片付けをしたりしています。つかれますが、楽しくもあります。なぜ楽しいかというと、家族全員が協力してできる事で、ぼくもその一員として役に立っているからです。作業の後の休けいもみんなで飲むお茶は、おいしいです。一日がんばるとおじいちゃんがおこづかいもくれます。それほひそかな楽しみです。

ぼくは思いました。先祖代々昔から、家族みんなでお米を作って田んぼを守ってきたのだらうと。今はぼくのおじいちゃんや弟が同じようにやっています。毎日あたりまえに食べているおいしいご飯も作る人がいないければ、食べられなくなります。ぼくは、ずっとおいしいご飯を食べていきたいので、ぼくの先祖が代々守ってきた大切な田んぼを、これからもあらさないようにしていきたいと思っています。

(令和元年度第九回「家族のきずな」エッセイ集・鹿行モラロジー事務所)

◆編集後記◆

◎三十余年間、ベネッセ教育研究所の代表を務めた島内行夫氏による巻頭言。マスコミを通じて氏が発信した調査データを目にした方は多いのでは。マスコミと言えば、ピア・サポートの山口権治氏は地元メディアに引っぱりだこ。子どもの人間関係作りは今、注目されている。

◎島内氏の「破天荒な教師」との表現は障害を持つ子どもたちと「富士山登山」を続けている大久保俊輝氏にも、そっくり当てはまる。登山で自信をつけた人がパールサンクス社・中村淳社長のもとで、繭を生産する日が来るかもと、うれしい想像を巡らせたくなる。いずれも動画との連動を計画中。乞うご期待。

◎大久保氏、中村氏のように人の可能性を追求する姿は実に尊い。高校時代には記録を残せなかった若者たちを、箱根に連れて行くこうと力を尽くす山川達也監督にも、ますます注目が集まる。今年度の予選会、麗澤大学の悲願達成に、例年以上の盛り上がりを見せることだろう。

◎麗澤大学の広中忠昭先生、海田幼稚園で道徳を指導する岡本美佳先生、早稲田大学本庄高等学院で斬新な英語授業を展開する細喜朗先生は、前号に続いての登場。それぞれアグレッシブで、新境地を切り開く姿に感銘を受ける。

◆「道徳的キャリア教育」の記事が掲載された「道徳サロン」。

https://www.moralog.jp/category/salon/mizunojiro/

